

宮田直彦のエリオット波動レポート

マーケット見通し(短期アップデート) 6月23日 10:05AM 更新

[日経平均・TOPIX]

【当面の想定レンジ】(日経平均) 50,500~73,500 円
(TOPIX) 3400~4100

[NY ダウ・S&P500]

【当面の想定レンジ】(NY ダウ) 45,000~52,000 ドル
(S&P500) 6300~7700

[ナスダック 100]

【当面の想定レンジ】(ナスダック 100) 23,500~30,800
(ナスダック総合) 20,700~27,200

[米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 140.000~162.000 円

[ドルインデックス(ドル指数)]

【当面の想定レンジ】 98.000~102.720

エリオット波動とは

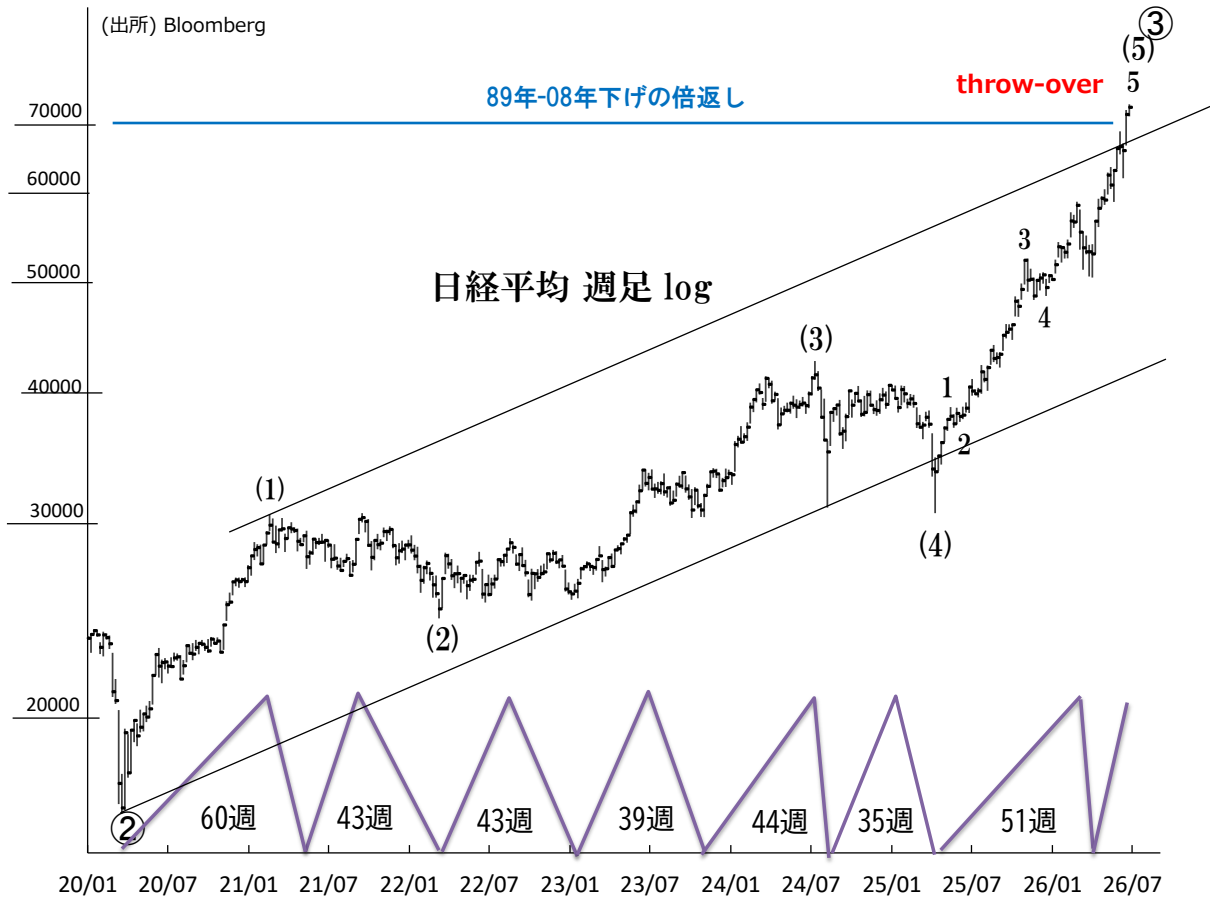
株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は5つの上昇波と3つの下降波(合計8つの波)で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。

日経平均・TOPIX



【週足 エリオット波動分析】

6月22日の日経平均は8日続伸となり、一時72,831円と最高値更新となりました。

アベノミクス以降でみると、2万円から3万円への大台替わりまで5年10カ月、4万円まで3年1カ月かかりましたが、5万円まで1年7カ月、6万円までは半年足らずと、大台替わりのペースが加速しています。初めて6万円を付けた今年4月24日から2カ月足らずでの7万円乗せ(6月16日)は、市場が2000年ITバブル当時のような狂乱状態にある証左といえます。

今月(26年6月)は、08年10月大底から212カ月(17年8カ月)、09年3月二番底から207カ月(17年3月)経過となります。日米とも株式市場には17年前後の長期転換サイクルがしばしば観測され、この17年サイクルは、今が長期上昇トレンドの最終盤であるという見方を日柄面から補完しています。

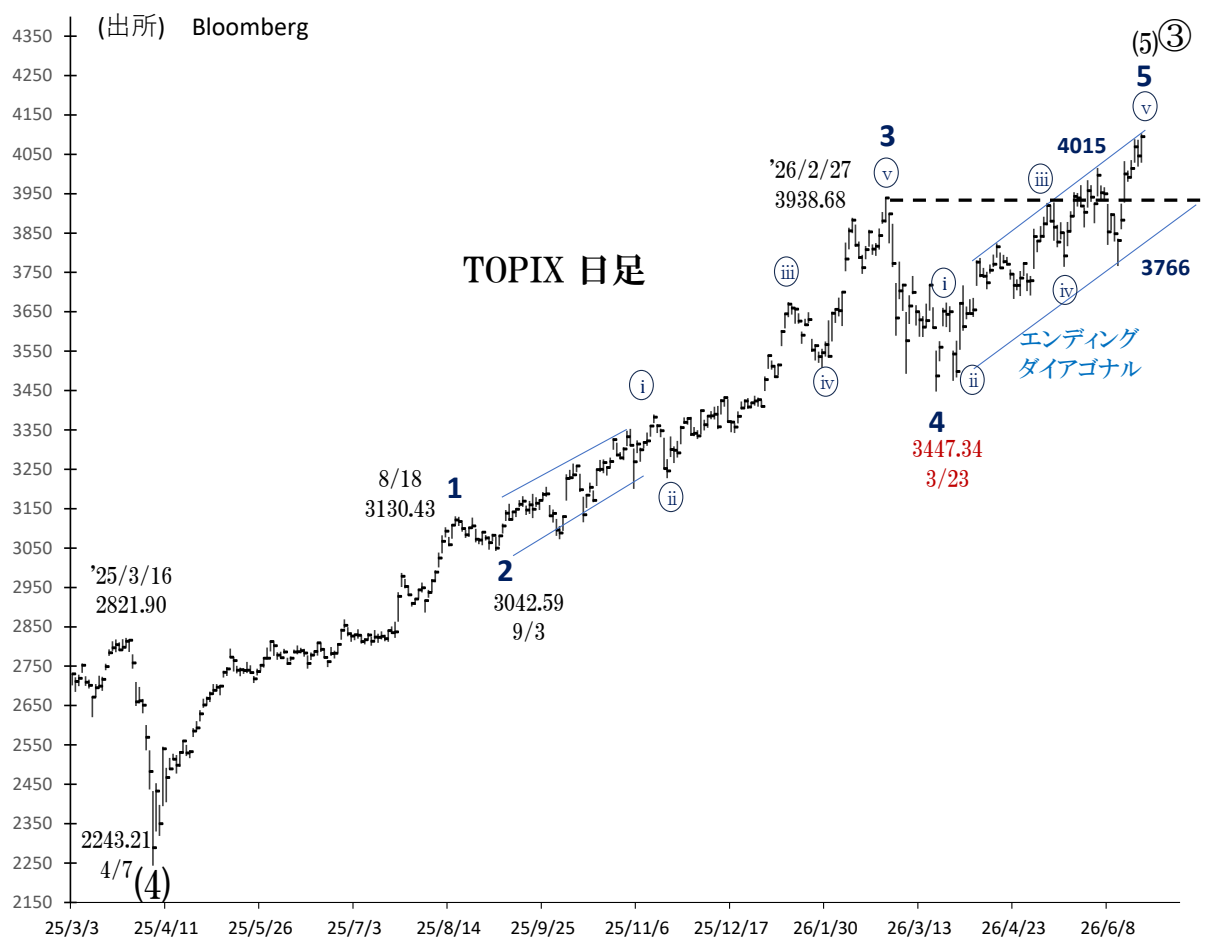
プライマリー級③波は最終盤にあり、ひとたび④波の調整に入れば高値から38%~50%の下落となるでしょう。

3月末からの週次サイクル(※)は、弱気型「レフト・トランスレーション(右肩下がり)」になるとみられ、サイクルの前半で天井を付けるでしょう。

今週(6/22-26)は現行サイクル13週目に当たり、さらに6月22日は現行サイクル始点(3月31日)からフィボナッチ数55日目です。今週は、③波天井のタイミングとして通常より高い、といえます。

高値示現後は、年末～来年3月のサイクル終点に向け株価は下落基調を辿るでしょう。

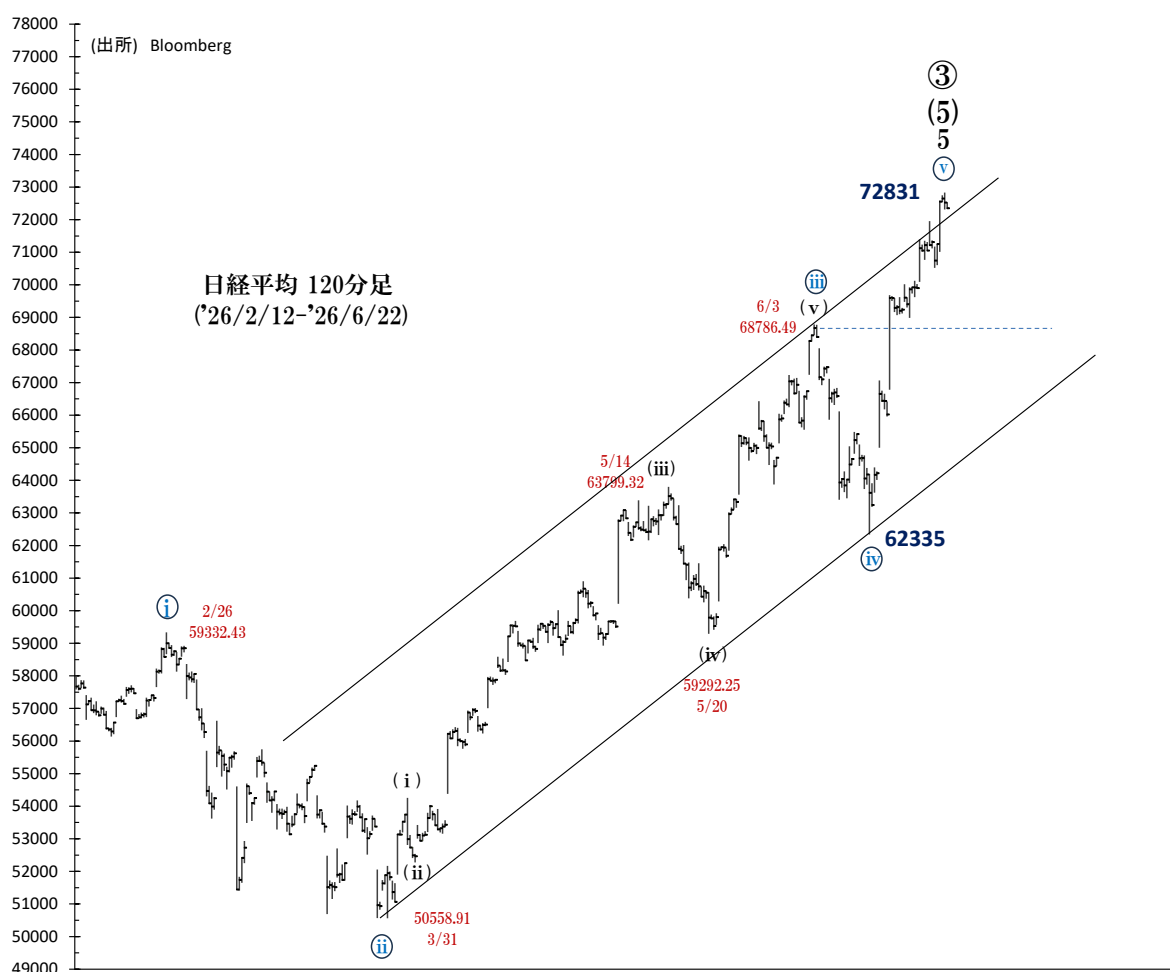
(※)週次サイクル期間(2020年以降の補正後)は45週±8週(37週～53週)。サイクルの高値から安値まで、下げ率は10%～26%(平均17%)。



[TOPIX]

3月安値からの第5波(ダイアゴナル)において、3764(5/20安値)からマルv波の上昇が進行中とされます。マルv波完成を以て、コロナショック底から6年余り続いた強気トレンドも完成し、プライマリー④波の調整入りとなるでしょう。3766を割るとマルv波終了の合図となり、当面は3447(ダイアゴナル始点)に向けた動きが想定されます。

プライマリー④波の調整規模は、プライマリー①波(2018年1月～20年3月)の下げ率(37.2%)と同等か、それ以上の大きさになると思われます。



[日経平均]

62,335 円(6/11 安値)からマイニュート級のマル v 波による上昇とみています。その完成を以て、2020 年 3 月底からのプライマリー③波も完了します。

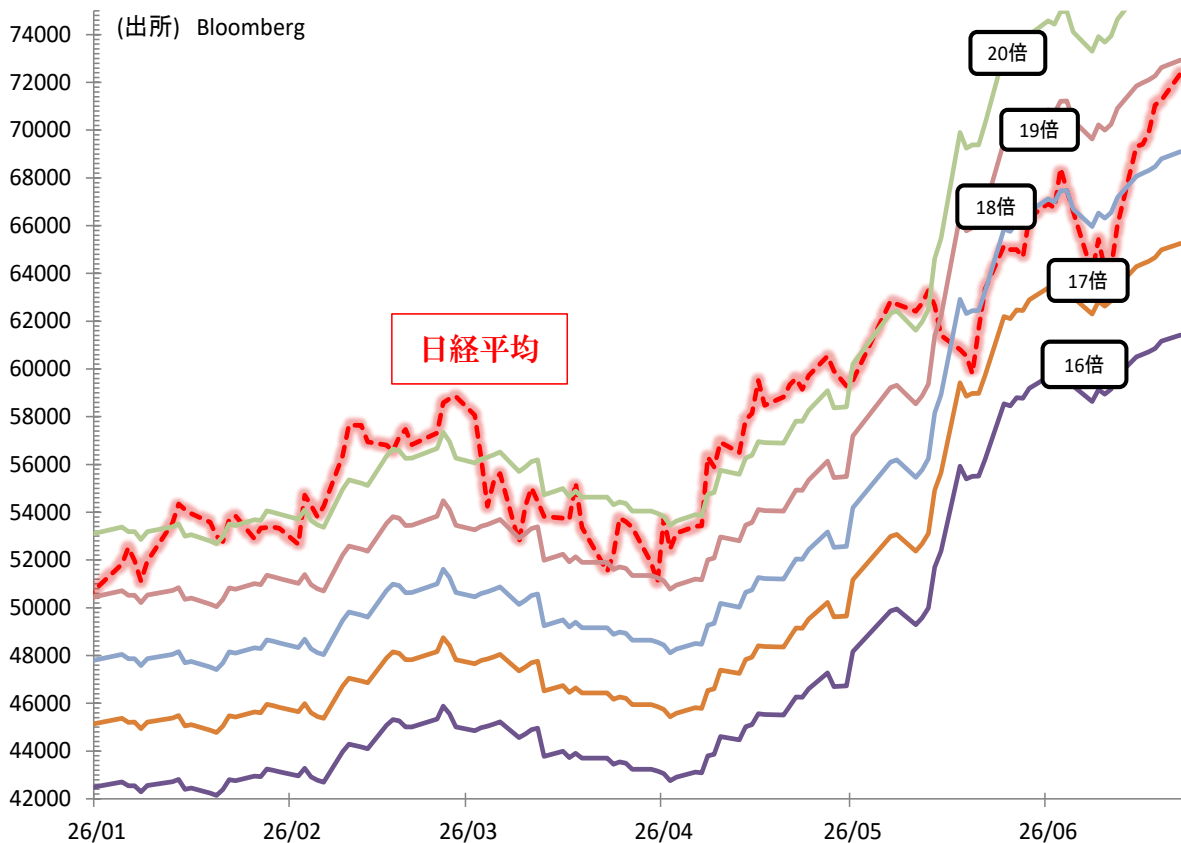
6 月 22 日、日経平均総合かい離はさらに広がりました。この日のかい離(64.83%)は、2013 年 5 月(※)以来 13 年ぶり、1970 年以降で 2 番目の大きさです。このように極端な上がり過ぎの反動は、まもなく起こるでしょう。

(※)13 年 5 月 22 日、総合かい離は過去最大(80.1%)に広がりました。ところが翌日からの「バーナンキ・ショック」を受け、日経平均は 5 月 23 日～6 月 13 日(17 営業日)にザラバ 22%も急落しています。

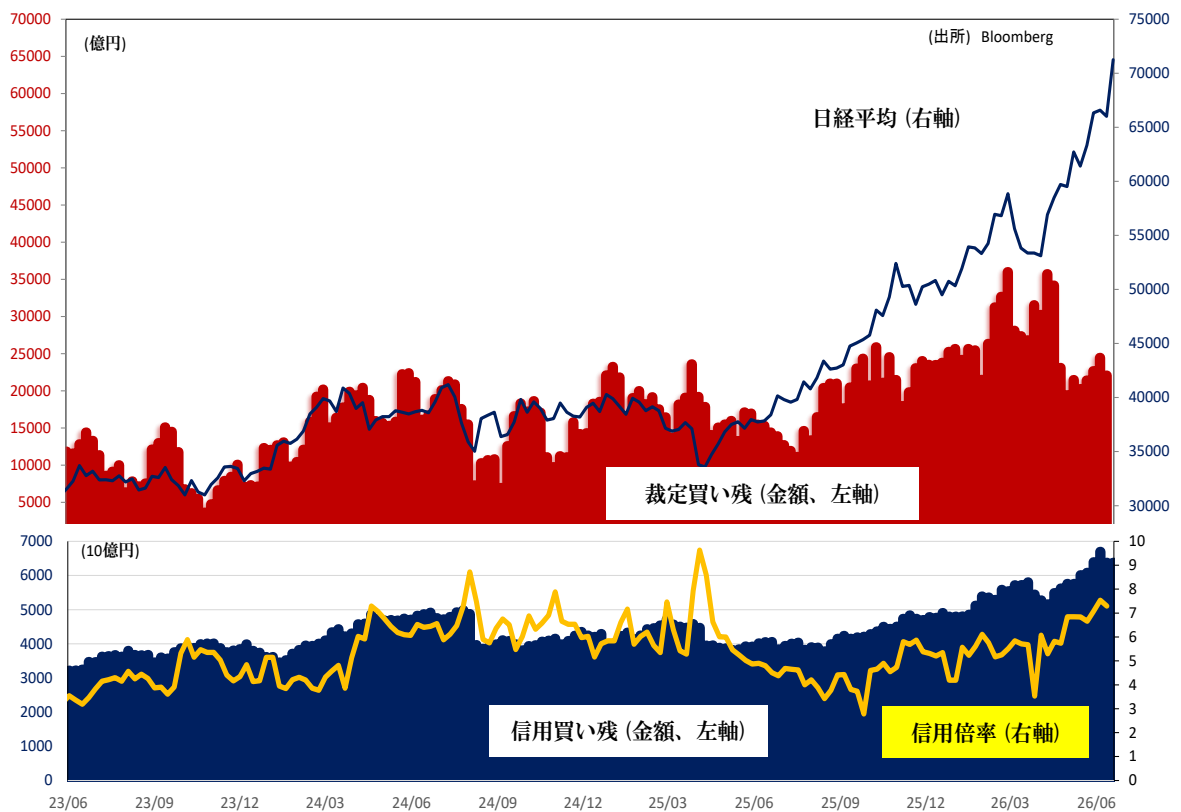
[予想 PER 別の日経平均水準]

6 月 22 日の日経平均予想 PER は 18.85 倍、予想 EPS は 3838 円でした(過去最高を更新)。

なお 2011 年以降の 15 年間で、日経平均の予想 EPS は大きく増加していますが、その約 80%は「円安効果」で説明がつかます。



[裁定買い残と信用買い残] (6月19日時点)



NYダウ・S&P500



【NY ダウ 30 週足 エリオット波動長期分析】

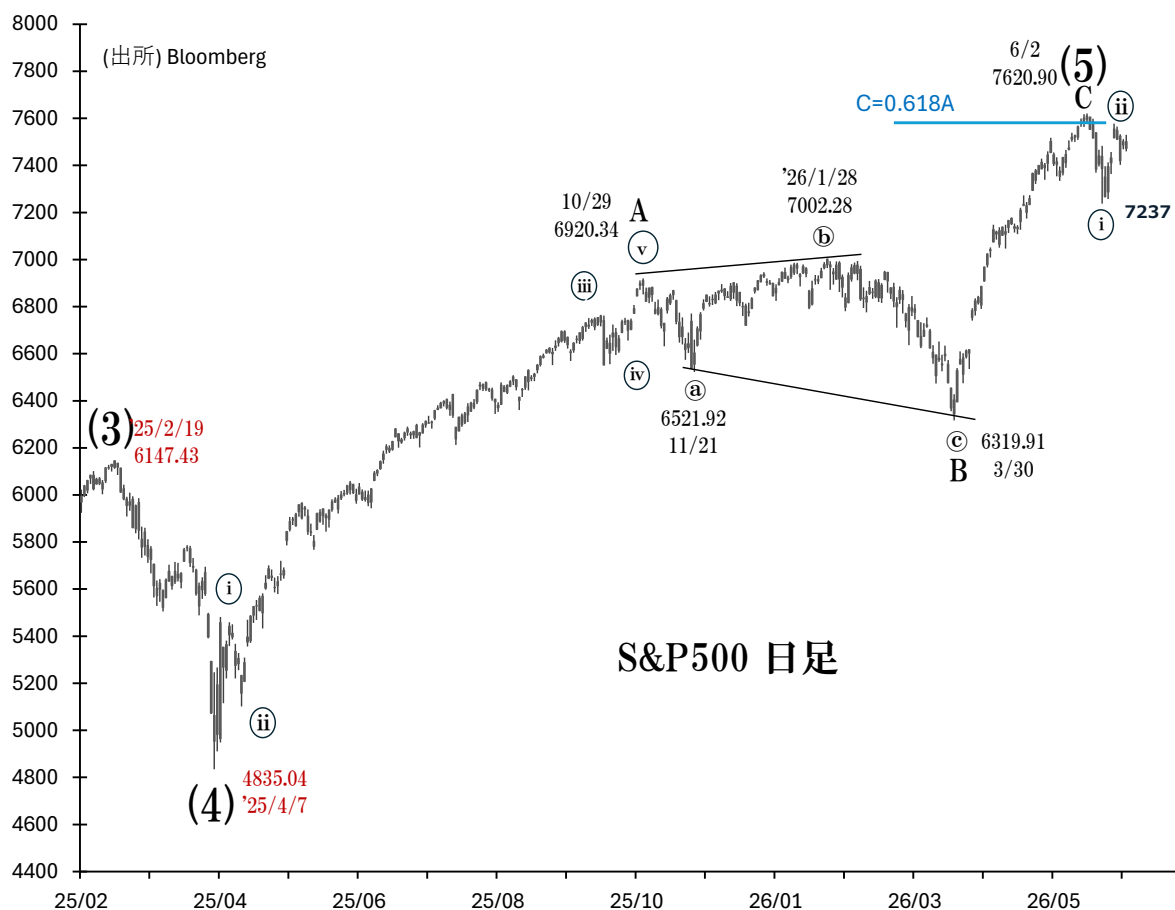
2020 年底を起点とするプライマリー⑤波は「エンディング・ダイアゴナル」(強気相場の最後に現れる転換パターン)を形成しており、その完了は近いとみています。

ダイアゴナル上限(今週は 50,192 ドル)を週末値で割り込むと、スローオーバー(throw-over)が確認され、それは天井打ちの最初のサインです。

通算 6 年余りの天井パターンが完成すると、その後 2~3 年の内に NY ダウはパターン開始点(18,213 ドル)へ向けて下げる可能性があります。

【NY ダウ 30 日足 エリオット波動分析】

6 月 17 日の最高値(52,281 ドル)は S&P500 からは確認されていません。先週足の「流星」(上ヒゲ長く実体が小さい)は、少なくとも目先のピークを暗示します。49,909 ドル(6/10 安値)を下回ると、調整入りのリスクが高まります。



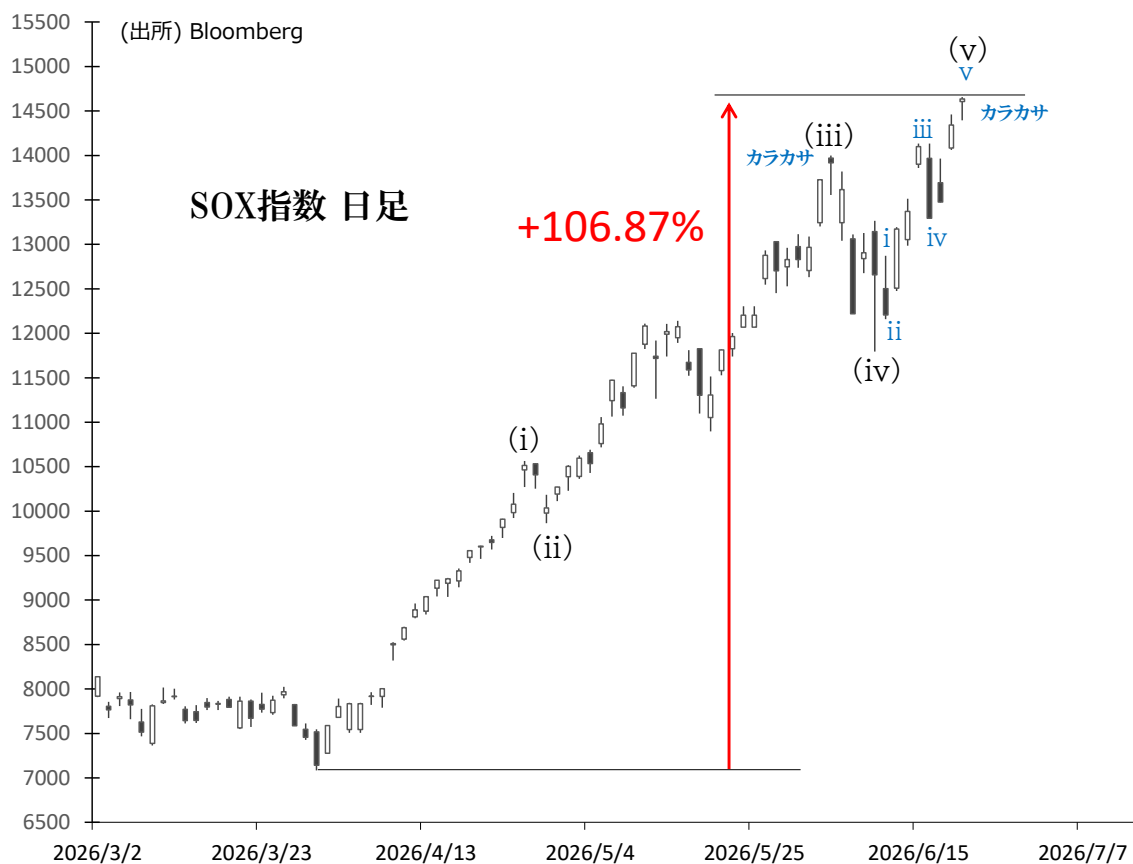
【S&P500 日足 エリオット波動分析】

6 月 2 日高値の 7620 は、A 波と C 波が黄金比になる水準[7605]を満たすものであり、ピークアウトとなっておかしくありません。

7237(6/9 安値)からの上昇がリバウンドであれば、目先のマル iii 波の下落がスタートするはずで、7237 割れでマル iii 波入りが濃厚です。

一方、7620 を上回る動きとなれば、3 月末からの上昇は継続していることとなります。

SOX 指数は6月22日に高値を更新しましたが、この日のローソク足は今回2回目の「カラカサ」です。同じパターンは6月3日に現れ、その後5日間で約16%下げる動きを先導しました。今回の天井暗示のパターンが、大きな調整の端緒になるかを注目しましょう。ちなみに、6月9日安値からの第(iv)波には、足元までに5つの波(i~v)が現れており、強気相場がいつ終了してもおかしくありません。



Bloomberg マグニフィセント7 インデックス

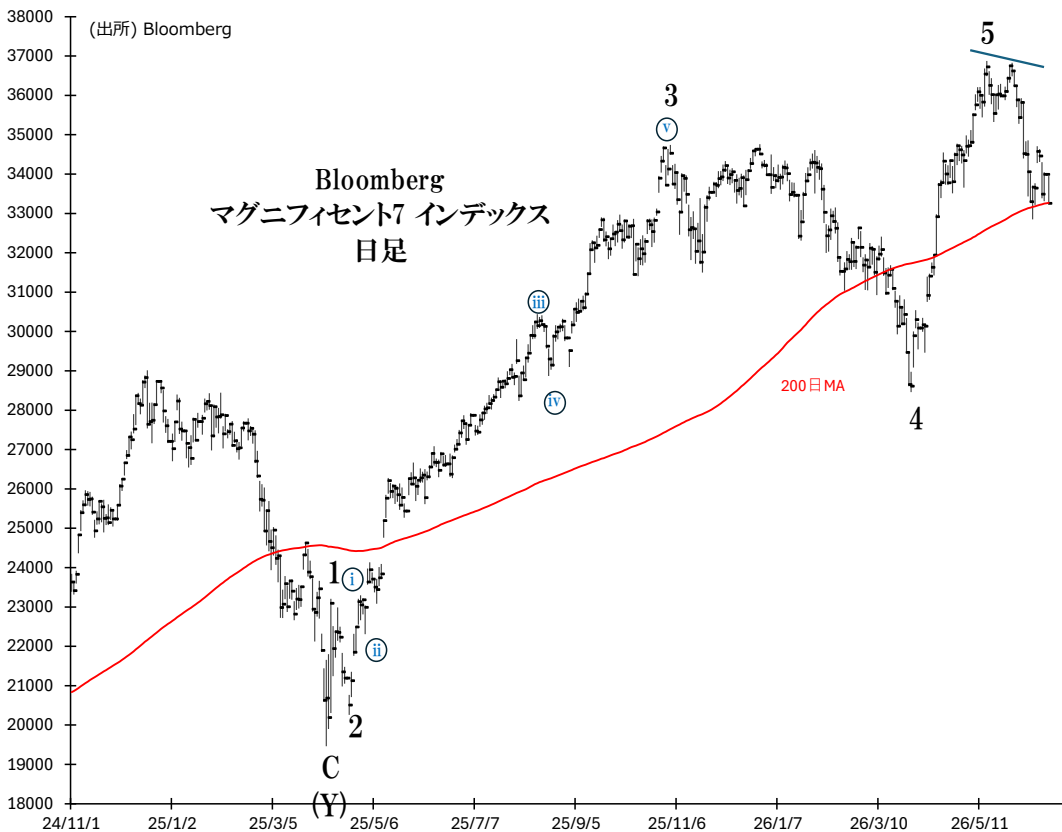
この指数が最高値を付けたのは5月14日です。それは他の主要指数より先行して高値を付けており、重要な天井パターン(未確認)とみることができます。

6月22日の終値は、200日MAをわずかに下回りました。6月11日の直近安値を割ると、下げ基調が加速する可能性があります。

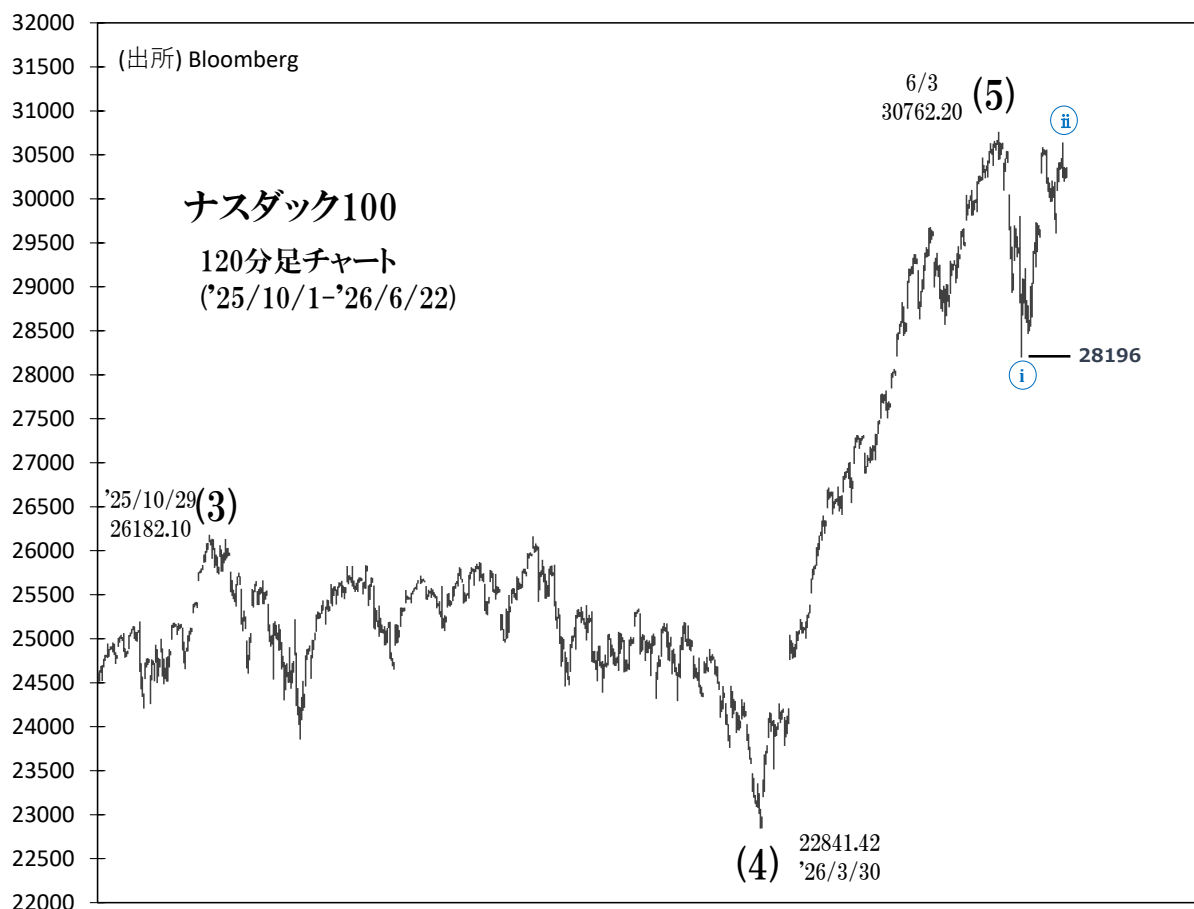
[ダウ輸送株平均] リバウンドは終わった可能性



[マグニフィセント7] 200日 MA を終値で下回った



ナスダック 100



【ナスダック 100 時間足 エリオット波動分析】

28,196(6/10 安値)からの上昇が、マル ii 波によるリバウンドとすれば、目的にもマル iii 波の下落が始まり早々に 28,196 を割り込むでしょう。

一方、高値を更新する場合は別の波動カウントが必要になります。

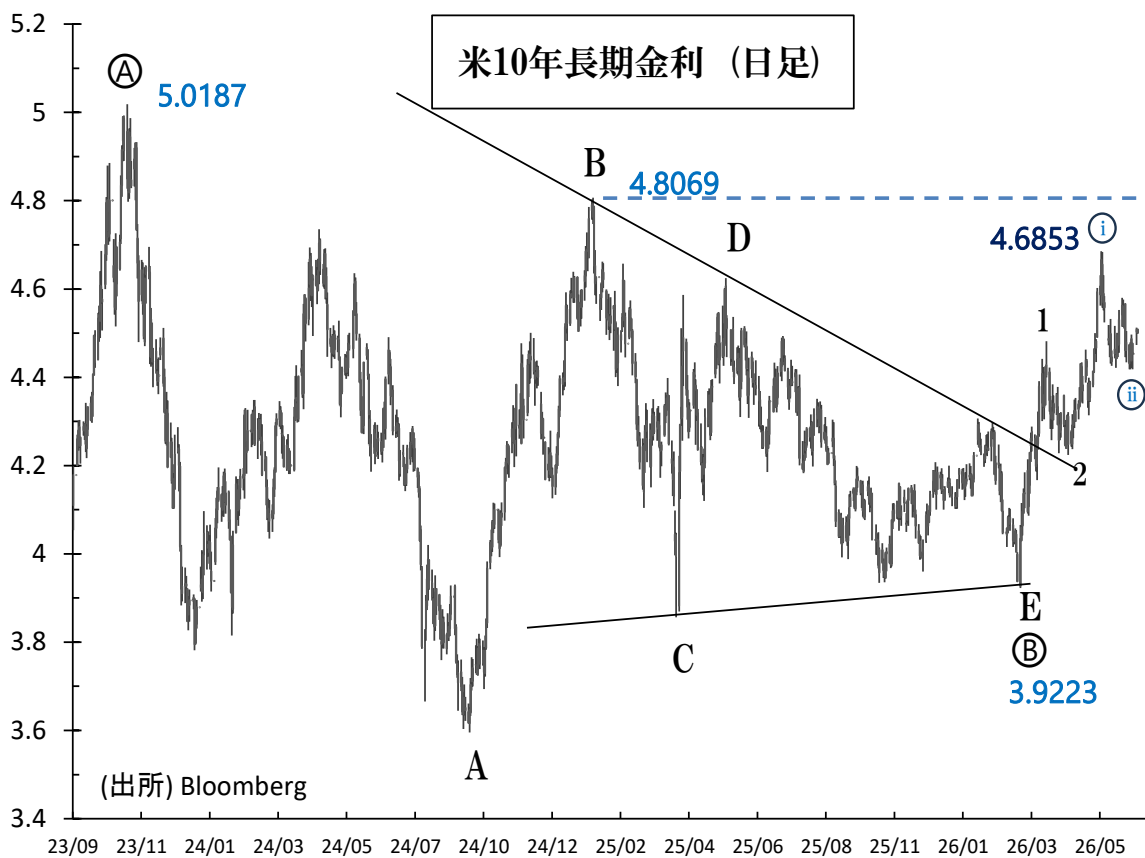
米 10 年長期金利は、今年 3 月の 3.9223%を起点とする◎波の金利上昇に入っています。

◎波は 23 年 10 月のⒶ波トップ=5.0187%を大きく上回る展開となるでしょう。

◎波の金利上昇は、今後数年続くと予想しますが、これは、景気悪化に関わらず物価と長期金利が上昇する「スタグフレーション」を示唆するものです。

金利上昇が続いていけば、AI・半導体株のバリュエーションは低下し、株価は大きく下落するでしょう。

[米 10 年長期金利] 5.02%を上回る展開へ



米ドル/円



【月足・エリオット波動分析】

2011年～24年のドル/円上昇は「ダブル・ジグザグ(W)-(X)-(Y)」です。24年7月の161.938円からは、(X)波のドル安・円高が展開中とみられ、それは2028年まで続くでしょう。

一方、161.938円を上回った場合には(足元水準は肉薄しています)波動カウントを改めなければなりません。この場合、25年4月からの上昇を(Y)波-(C)波とみなします。(C)波完成を以て、2011年来のダブル・ジグザグは完成し、その後は大きな下落(ドル安・円高)を迎えることとなります。

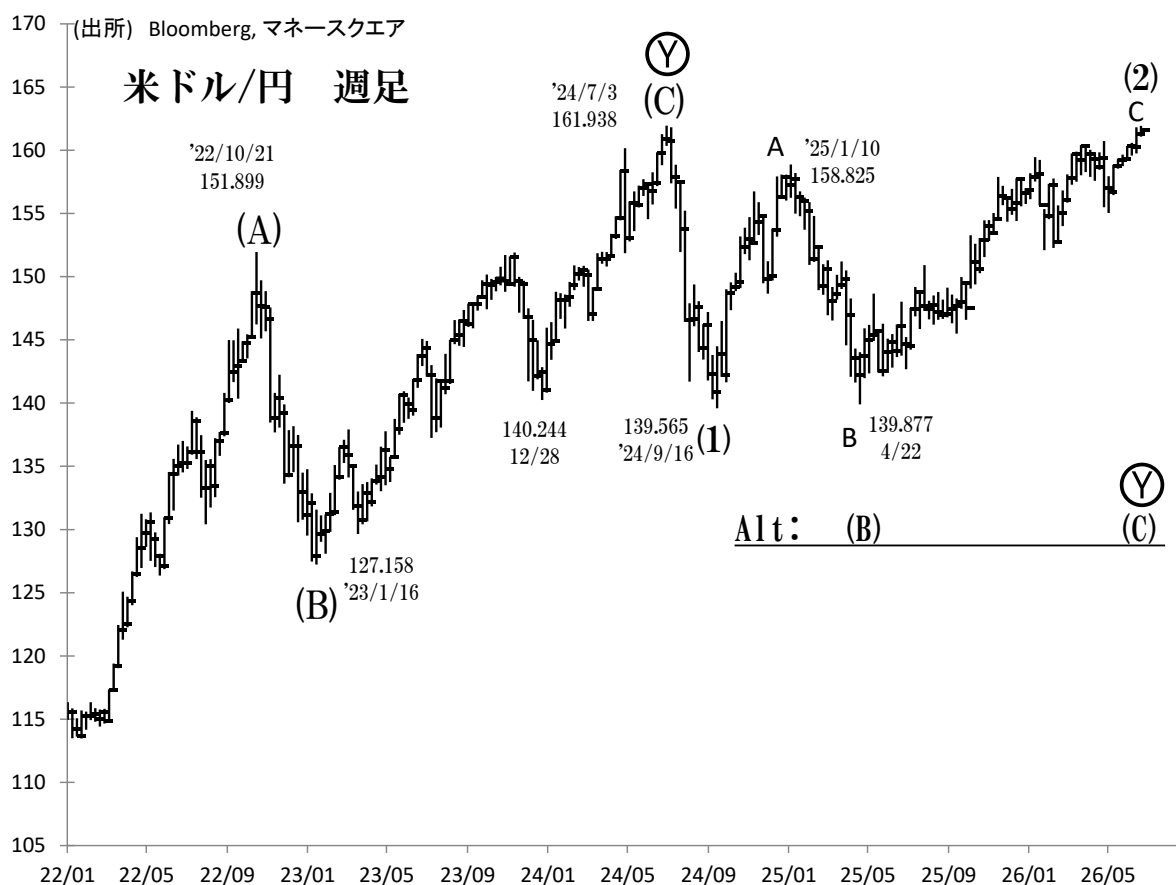
日米実質金利差から導かれる米ドル/円(以下、ドル/円)の水準は、現在1ドル=142-143円です。足元の日本円は金利差からみた妥当な水準より、極端な過小評価が1年以上も続いています。

さらには、日本が「金利ある世界」に入った一方、実質実効円レートは今なお史上最安値圏にあります。

このような「超円安」を筆者は「円安バブル」とみており、それは今後いつ弾けてもおかしくありません。

「失われた20年≒金利なき世界」では、円売りで調達した資金を様々なアセットに投資する円キャリー取引(※)が世界の潮流でした。しかし「金利ある世界」では、円キャリー取引の巻き戻し(円買い戻し)が進むと共に、市場ボラティリティが急上昇するリスクに留意すべきでしょう。

(※)BIS(国際決済銀行)によると世界の円キャリー取引規模は40兆円程度とされます。



【週足 エリオット波動分析】

足元水準は 24 年 7 月の 161.938 円に肉薄しています。それは 24 年 9 月(139.565 円)からの第(2)波「フラット(A-B-C)」の完了点とみられ、この見方通りなら今週から第(3)波のドル安・円高が始まるでしょう。ひとたび第(3)波入りとなれば、[140 円~125 円]を目指すでしょう。

161.938 円を上抜いてからのオルタナティブ・カウント

22 年 10 月(151.899 円)からの(B)波トライアングルの完了点は、25 年 4 月の 139.877 円です。それ以来のドル安・円高は(C)波とカウントされ、その終了を以て 2011 年からの「ダブル・ジグザグ」が完成します。

24 年のドル/円高値を抜くと、8-9 年で主な高値を付ける「8 年サイクル」は一時中断となります。一方、16 年半ごとに主な安値が来る「16 年半サイクル」は続きます。16 年半サイクルによると、次の主なドル円安値は 28 年 4 月前後に付ける見込みです。



【日足 エリオット波動分析】

第(2)波中 C 波の上昇が 25 年 4 月(139.877 円)から展開中とみられます。それは 5 つの波(マル i~マル v)で構成されます。

154.983 円(5/6)からのマル v 波は目的的にも終わるでしょう。157 円を終値で割る動きは、25 年 4 月以来のサポートラインからの下入れ開始の合図となります。

金利差からのドル/円推計値

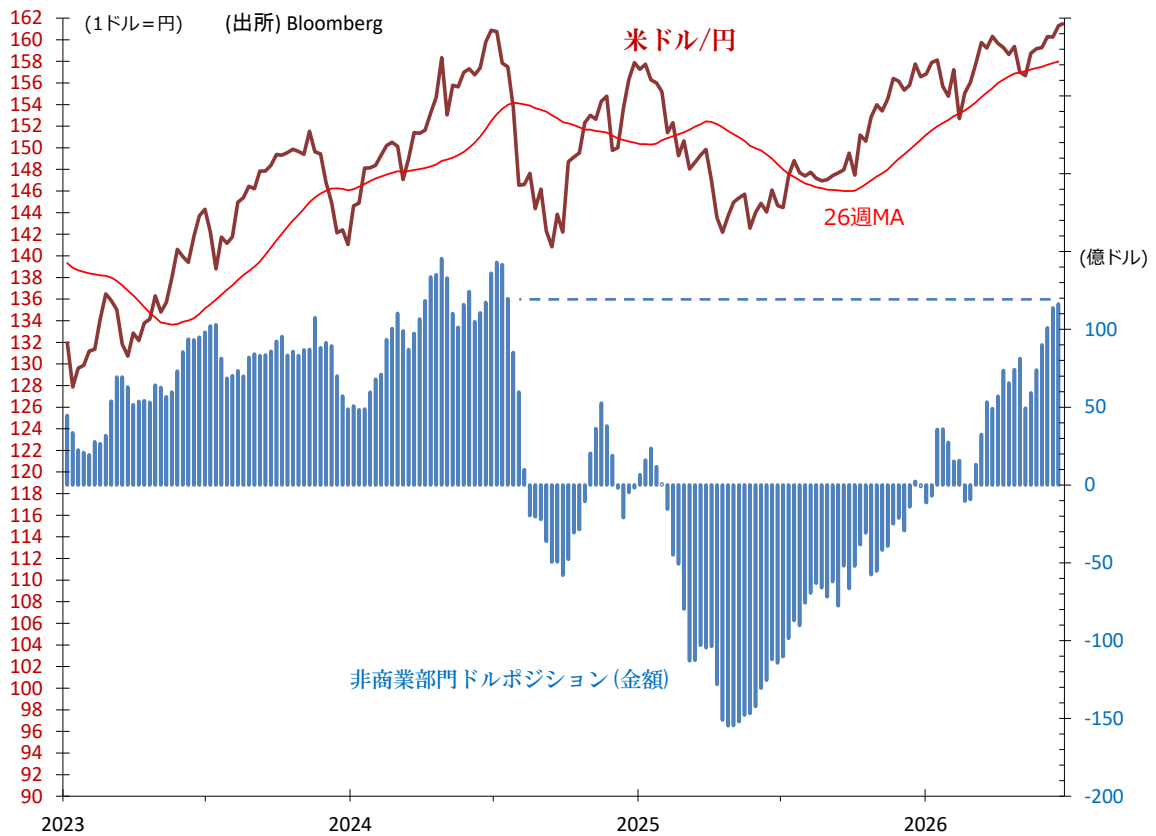
足元、日米実質金利差からのドル/円推計値は[142.486 円]です。

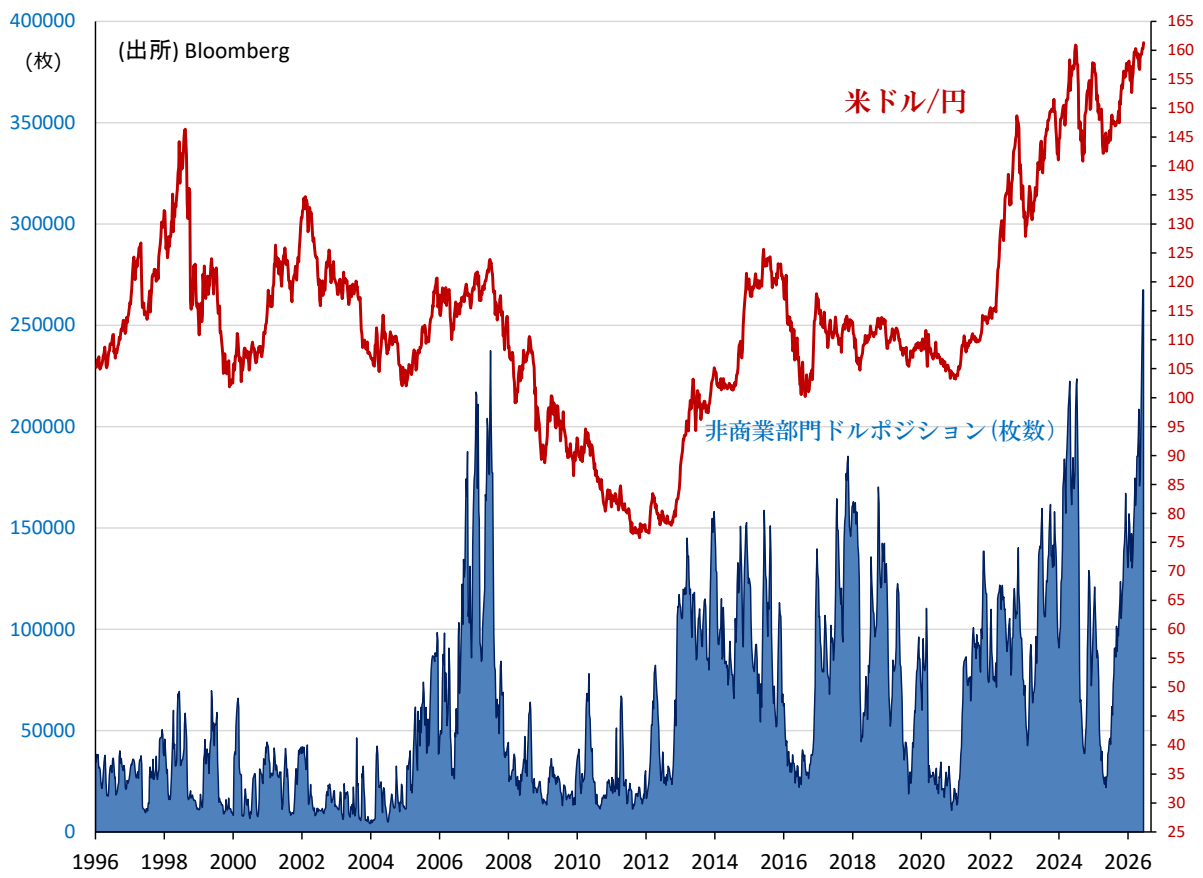
円売り持ち高が 6 週連続で拡大 (2026 年 6 月 16 日時点)

IMM 通貨先物市場において、投機筋(非商業部門)の円売り持ち高は、前週の 113.75 億ドルから 117 億ドルへ 6 週続けて拡大しました。円売り持ち高は、円買い介入が入ったときの水準(81.2 億ドル、4/28 時点)を既に大きく上回り、24 年 7 月以来の高水準です。

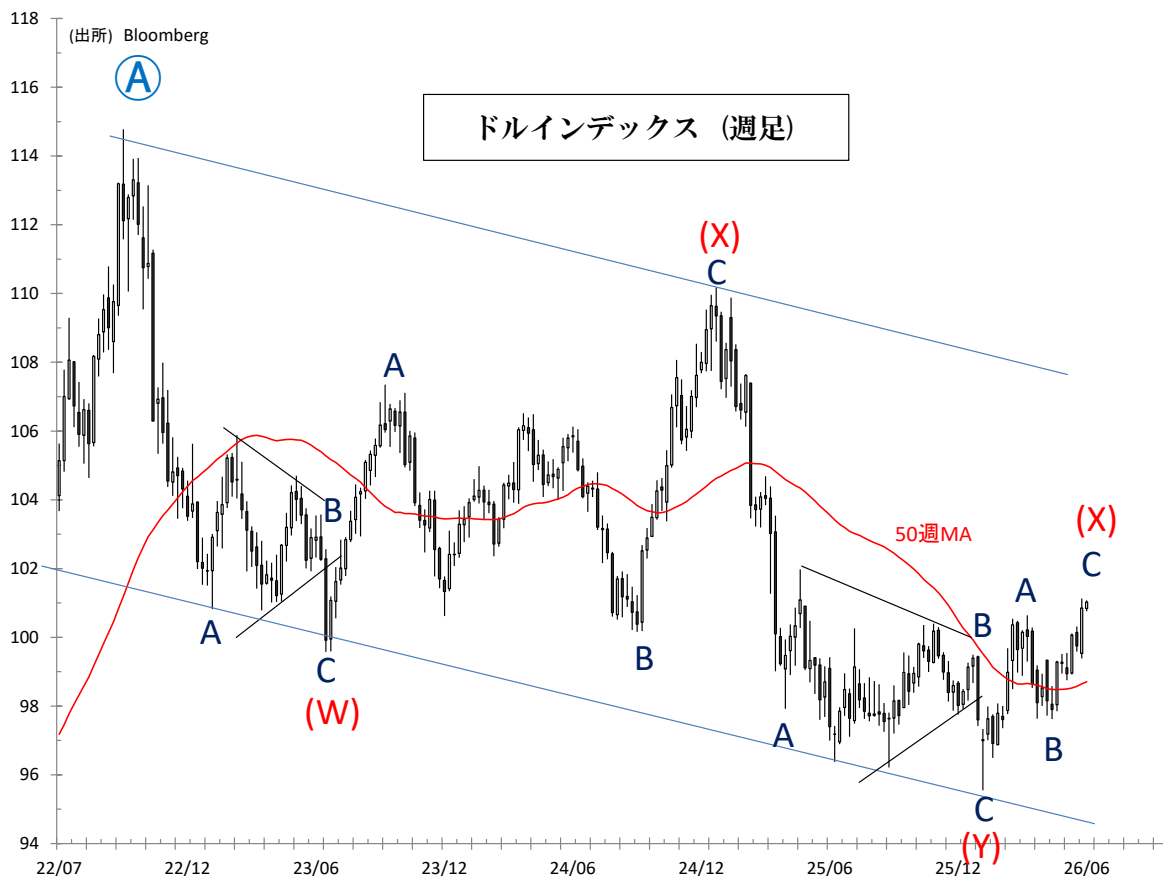
円売り枚数は過去最大を更新

投機筋の円売り持ち枚数は、6 月 16 日時点で 26.75 万枚と 3 週続けて過去最大となりました。円高へのマグマは溜まっています。





ドルインデックス (ドル指数)



【エリオット波動分析】

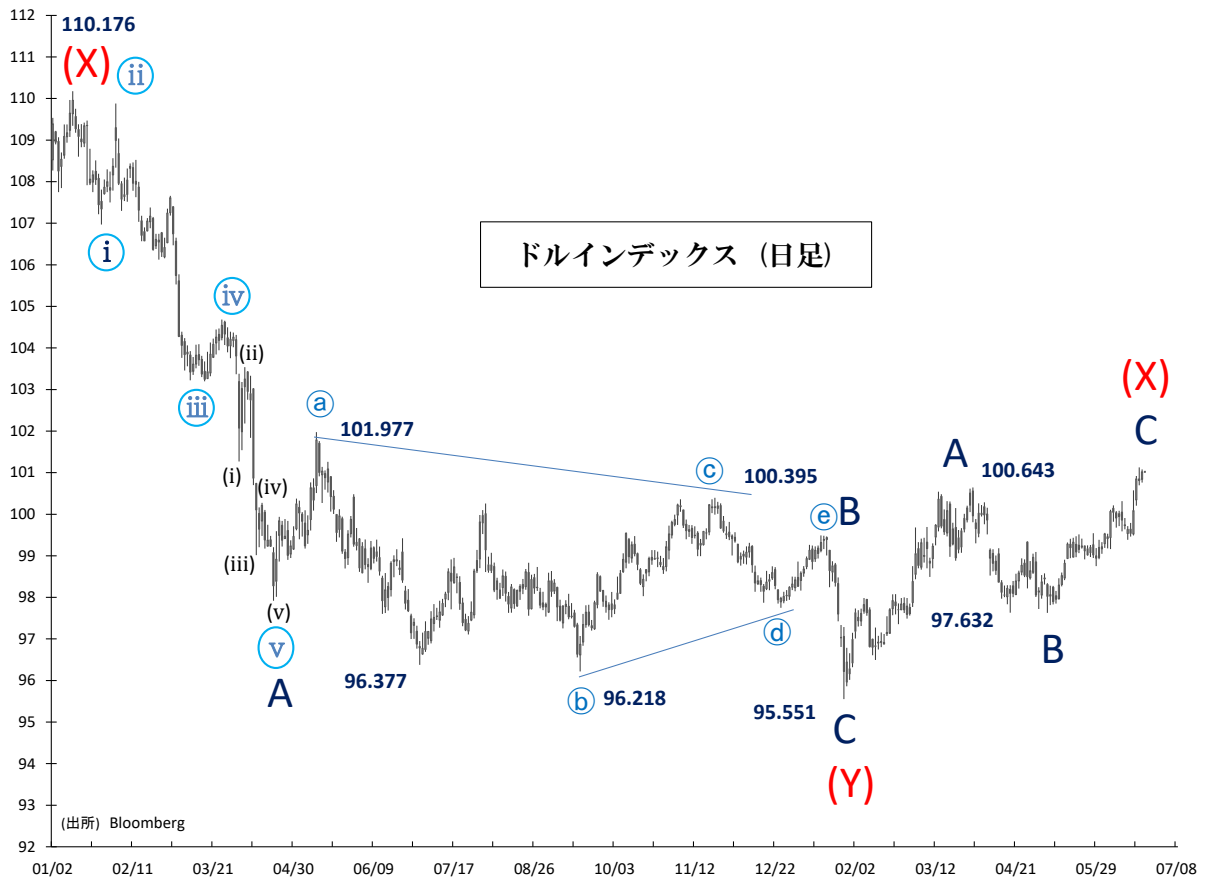
22年9月高値からのドル安②波が、今年1月安値で完成した可能性は低いでしょう。

①波のドル高は通算14.5年(08年3月⇒22年9月)かかりました。仮に②波の終わりが今年1月だったとすると、22年9月から通算3年4カ月しか経っておらず、①波とは日柄的なバランスを著しく欠いてしまいます。

結論的には、②波は「トリプル・ジグザグ(W)-(X)-(Y)-(X)-(Z)」のコースを辿っているとみられます。

今年1月安値からのドル高は、②波中の(X)波に位置付けられ、それが終わると、次は3番目のジグザグ(Z)波が展開されていく、と思われれます。

さて(X)波のドル高は、当面[101.138-102.717]を目指しているとみられます。その辺りで頭打ちとなり、(Z)波のドル安へ移行していく可能性があり注目です。6月19日には一時101.127へ上昇、上記レンジに突入しました。



※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できると思われる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもありますが、お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引における取引手数料は無料です。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差（スプレッド）があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4%以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率（為替リスク想定比率）を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率（為替リスク想定比率）は変動いたします。店頭 CFD 取引に必要な証拠金額は、取引総代金の 10%です。

金融商品取引業 関東財務局長(金商)第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア
